

令和元年度 奈良市立 春日保育園 研究実践概要

園長名 砂川 佐知

全園児数 182名

1. 研究主題 自ら考え、判断し意欲的に行動する子どもを育てる
— 子どもの発見、探求を引き出す環境構成の工夫 —

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

従来から取り組んでいるテーマ保育に重ね、様々な経験を通して子どもが発見や探求を行う中で、見出す力そして自ら考え判断し意欲的に行動をする力が必要であると考えられる。小さな発見の中で子どもが面白いと感じ取る事が物事の本質を探り、繰り返し試す事に結び付き、又意欲的に関わり学び展開した活動によって資質・能力が育まれると考える。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

主体的、意欲的に物事に関わり発見や探求を行い、試行錯誤を行いながらどのように遊びを展開し創り出していくかを保育教育士は見取り、子どもが意欲的に活動を行う力を育てる。

②研究の重点

- ・子どもが発見、探求を行う姿を追求し環境構成を工夫する。
- ・主体性を育み、試したい・知りたい・面白い を友達や保育教育士と伝え合いながら人と関わるコミュニケーション力を育てる。

③活動の方法

従来のテーマ保育+子どもの発見・探求を主とする保育教育士の読み取る力と記録する力を培い、子どもが遊びを展開する姿による環境構成の工夫と再構築を行う。乳児組においても、発達に応じた環境構成の工夫と再構築を行う。園内会議や園内公開保育等を通して園全体で共有と検討を行い、次年度へとつなげて行く。

【0歳児】 はいどうぞ

砂場で保育者と共に砂を触ったり容器に砂を入れたりして遊んでいた。幼児が草花を用いてごちそう作りをしているのをじっとみていた A 児は、幼児が他の場所で遊び始めるとすぐにその場に行きフライパンやお玉を持って遊び始めた。「A ちゃんもお料理がしたいの？」と尋ねるとうなずいて笑顔で保育者の顔を見つめた。幼児がその場に戻って来ると戸惑っていた A 児の様子を見て、保育者が少し離れた所にあるテーブルに 0 歳児の体に合ったやや小さめのボールや

鍋、おたま、お皿等を並べて置くと A 児はすぐ遊び始めた。砂をお皿に入れて「どうぞ」と言うように保育者に差し出し、「ありがとう。おいしいね」と食べる真似をした保育者とのやりとりが続いた。その様子を見ていた周囲にいた子どももコップやお皿に砂を入れて保育者に手渡し、嬉しそうに繰り返しやり取りを楽しんでいた。

〈考察〉

異年齢児の遊ぶ様子を見て興味を持ってしてみたい気持ちを保育者が見取り、0 歳児に応じた遊び場や道具を準備した事で子どものやってみようとする気持ちが実現され、さらに遊びへの興味が出てきた。環境構成の工夫や遊びを展開する姿に応じた環境構成の再構築を行う事で、面白いと感じ意欲的に関わる姿に繋がって行くと考え。又年齢が小さければ小さいほど人的環境を大切にしていく必要があり、子どもの気持ちに言葉を添えて応えることでコミュニケーション力が培われると考える。

【1 歳児】 わーつめたい

赤・青・黄・緑の色がついた大・小の寒天をトレイやバットに保育者が入れているのを見て子ども達が珍しそうに見に来た。すぐに手を伸ばし握ったりつぶしたり「つめたい」「わー」と声をあげ感触を楽しんでいる。子どもが遊ぶ様子を見ながらタイミングよく小さなボールやザル、小さな容器やスプーンを準備するとボールにどンドン寒天を入れ混ぜたりつぶしたりをずっと続けていた。又小さな容器に同じ色の寒天を集める子やスプーンで容器に移そうとする子もいた。

〈考察〉

手や指で触って冷たいと感じる感触に寄り添い共感をする保育者の姿や、視覚的に興味関心が持てるようにカラフルな色の寒天を作って遊びに取り入れ、遊びの様子を見ながら次に容器などを加えた事でさらに遊びが広がった。事前に興味を持つであろう遊びの環境設定を行う事に加え、子どもが遊ぶ姿を見取りながら環境を追加することも必要であると考え。

【2 歳児】 どんぐり転がるなー

異年齢児の遊びを見てトイを使った転がし遊びに興味を持っていた。直線コースを保育者と共に作り、玉（ガチャポン容器）を転がしていたが、転がし遊びのコーナーにどんぐりを準備しておく「どんぐりがある、転がるかな」と保育者に話しながら A 児はどんぐりを 1 個手に持って転がしていた。次に 2 個のどんぐりを手にして 1 個ずつ連続で転がしてみると少し早く転がったように見えたのか「早いな」と速さに興味を示した。それを見ていた B 児が今度は両手いっぱいどんぐりを抱えて一度に転がし A 児も一緒に転がる音と速さに面白さを感じながら繰り返していた。築山にもトイを使った転がしコーナーを作り場所の変化を付けると、トイから転がり出たどんぐりが様々な方向に転がっていく事にさらに面白さを感じ、「あっちにも行ったな」「あれ こっちに行った」と遊びを通して試していた。

(考察)

転がし遊びのコーナーにドングリを準備した事で、以前のプラスチックの玉との違いや1個2個と数による違いの面白さ 又速さや音などの違いに気づいた。保育者の物的環境によって子どもの探求心や気付きのきっかけになっていくと考える。又人的環境として保育者が一緒に遊びを楽しむことで遊びの共有が他児と関わって遊ぶ楽しさに繋がっていくと考える。

【3歳児】 「ぴったり」「でっかい」

プロジェクトテーマ：大きさ

保育室コーナーに子ども用と大人用の服の上下を置く。それに気づき A 児は大人用の服、B 児は子ども用の服を着た。大人用の服を着た A 児「でっかいなあ」子ども用の服を着た B 児「ぴったりや」と言いながら、互いに見比べ A 児と B 児は服を交換して着た。A 児と B 児は服を床に並べて大きさ比べをしてみようと考えて大きさの比べ合いもした。大人用の服の大きさから「先生はでっかいで」と、保育者と背の高さ比べを思いついた。後日 C 児が制作でコップを作り「先生大きいからこっちのでっかいコップあげる」と友達が作った物よりさらに大きいコップを作って保育者に手渡した。

(考察)

プロジェクトテーマ（大きさ）で『大きさ』に関する環境設定を行った事で、遊びの中で試し発見をしたことを友達と共有をしながら大小を比較する機会や経験をもとに感じたり気づいたりするきっかけとなった。衣服の大きさの違いから背の高さの違いをイメージし自ら考え予測をたて試してみた事や一番大きなコップ作りの活動に結び付いた事から、子ども自らの発見や探求が次への遊びを展開し創り出すと考える。

【4歳児】 ヨモギはいい匂い

プロジェクトテーマ：はる

散歩に行き、ヨモギを見つけた。A 児は「裏は白くてふわふわ」「裏がしろい葉っぱを探す」とみんなでヨモギ探しが始まった。摘んだヨモギは匂いがし、B 児は匂いを嗅ぎながら「これは匂いがするからヨモギ」「裏がふわふわで白いし、いい匂いがするからヨモギ」とヨモギの特徴を友達に知らせ、みんなでたくさん摘み取り持ち帰った。「明日はヨモギを使って遊ぼう」と言う思いを受けてヨモギを園庭のコーナーに出しておく、すり鉢やすりこぎを使ってすりつぶす遊びになり「すりつぶしたら、もっといい匂いがする」と気づいた B 児は友達を誘って毎日遊びを続け、水を使って色水遊びに展開した。

(考察)

子ども自らがヨモギの特徴に気づき友達と共有をする事で次への発見につながった。ヨモギを園庭に置いた事で、興味を持ち知りたい思いや繰り返し試そうとする意欲につながり、遊びに取り入れ面白さを見出し友達と共に遊びを共有し展開していく子どもの姿に繋がったと考える。又子どもの遊びを読み取り環境を整えていく必要がある。

保育室の水槽に水を入れ置いた物に気づき、A児が様々な玩具や素材を入れて浮くか沈むかを試して遊んでいた。ビー玉だけでは沈むがプラスチックトレーの上に乗せると浮くことに気づき「浮いたよ。船みたい」という言葉をきっかけに船作りがみんなの中で始まった。子どもと共に意見を聞きながら様々な教材を準備した。イメージを膨らませながら取り組む中で、A児は旗を付ける為に画用紙を切り、セロハンテープで貼った。B児は「エンジンを付ける」と言い、船の底にペットボトルをガムテープで貼った。プールで浮かせる事になり、A児の船は風で少し進んだが帆先が濡れ、セロハンテープが剥がれて壊れてしまった。B児の船は壊れなかったが全く進まなかった。その様子を互いに見ていたA児とB児は「ガムテープを使ったら破れないよ」「風が旗にあたったら進むよ」と教え合い、失敗を繰り返しながら船を作り完成をさせた。



〈考察〉

前年度にも経験したプロジェクトテーマ『浮く・沈む』の一環で遊びを発展させてほしい思いから、浮く物だけではなく子どもが浮くであろうと判断をした教材を準備した。自ら考え、発見してイメージを膨らませながら船作りの活動に繋げ、自分の考えを実現したいという思いを強く持ち失敗をしながらも繰り返す姿が見られた。子ども自らが考え予測をし、意欲的に取り組める環境を作り出す事が大切である。

5. 研究の成果

プロジェクトのテーマを主に取り組みを行っているが従来の意図的な遊びの設定と捉えるのではなく意識を向けるきっかけと考え、子どもの疑問や興味を見取り自らやってみたいという気持ちになるような環境作りを考えて行く必要性を確認した。乳児期では保育者自らを人的環境として捉え保育者の動きや表情、話し方がその場の雰囲気や子どもの遊びへの意欲に影響を及ぼすと考え、思いに気づき遊ぶ姿を見取り次につなげて行く保育者の力が必要となる。年齢があがるにつれ子どもが発見をした面白いと思う心を動かさせた遊びの中で、様々な体験を積み重ね友達と相互に関連をもちながら意欲的に何度でも試し挑戦をする姿を通して、保育者は遊びの展開に即したアプローチを行いながら何に興味関心を持っているか、又自ら挑み発展をしていく過程を見取り幼児期にふさわしい環境構成や再構成を行う必要がある。

6. 今後の課題

遊びの中で発見し自ら試し、友達に伝えている姿を見取る保育者の力量も必要となる。又友達と共に遊びの楽しさを共有し、子ども自らが必要な環境を自発的に取り入れられる態度が培われるよう保育の質を高めて行きたい。